
魔法先生ネギまZ！

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギまZ！

【Nコード】

N4774Z

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

とある姫がネギまの世界に舞い降りた！彼女は人を鍛えるのがめちゃくちゃ上手い！彼女はめちゃくちゃ強い！だが重要な戦いは鍛え上げた弟子に大体任せる！それが彼女である！

プロローグ（前書き）

この小説を読んだらどうか感想をください。
お願いします。

アドバイスをいっぱいください！

プロローグ

今、ある女性が超天才科学者の部屋の前に来ていた。

この女性が超天才科学者の部屋に来ていたのは暇だからである。

「博士、部屋に入ってよろしいかしら？まあ駄目と言っても入りま
すけど。」

ガチャ。

有無を言わずにこの女性は部屋に入った。

「ちよっ！？今は次元転送装置の調整を・・・そもそも今は入っ
ちや駄目ってゆう貼り紙が扉に貼ってなかったかい！？」

「別に貼ってませんでしたわ？」

ブーウ ブーウ ブーウ

「ヤバッ！？」

「あら？」

カツ！シューウウウ……

「次元転送装置がちよっとな暴走して転送しちゃったよ……まっ、い
つか。」

博士の次元転送装置の暴走により女性は何処かの次元へと転送して
しまったのだった。

「ちっ！あのクソ科学者あ！よくも転送装置暴走させやがりましたわね！！」

勝手に入ったこの女性の責任だと思っがこの女性は科学者に責任転嫁をした。まさに暴君。

「……………今何かちょっとイラつとしましたけど……………まあ気にしないで今はこの世界の事を把握する事が大事ですわね。」

この女性はこの世界を把握する為に辺りを歩き始めた。

「とりあえずは人を見つけて話をする事ですね。情報収集には人との会話が一番ですわ。」

この女性はどうやらこの世界を知るにあたってまずは人探しを始めた様だ。

「人…人…ん？本をたくさん持つてる子がいますわね。あの子に聞くとしましょうか……………あら？」

この女性が本をたくさん持つてる子と話をするためにその子に近づこうとすると本を持つてる子は階段で足をくじき階段から落ちようとしていた。

「ちっ、仕方ないですわね。」

この女性は凄まじいスピードで階段から落ちようとした子をキャッ

手して助けた。

「おい、大丈夫ですか？」

女性は一応、安否を聞いた。

「は、はい大丈夫です……。」

「じゃあもう貴女を降ろしますわ。」

この女性が本を持つてる子を降ろした直後。

少年が女性に近づいて来た。

「あ、あの宮崎さんを助けに来てくれてありがとうございます！」

「別にどうって事じゃないから礼なんていりませんわ。」

女性は全然たいした事はしていないという顔をしている。女性は、あつ、という顔に突然なった。

「そういえばこの世界の事を聞こうとして人を探していたんですわ。」

この女性は自分の目的をちょっと忘れていた様だ。少年が女性にある事を聞いた。

「一つ聞いていいですか？」

「聞かせたら、ちょっと私も聞いてよろしいかしら？」

「あつ、はい……その頭の上の輪っかはなんですか？」

少年は女性の頭の上に浮いている輪っかの事を聞いた。女性はそれに普通に答えた。

「そりゃ死んでるからに決まってるでしょう…因みに肉体はありま
すわよ。」

「ええ！？死んでるって!？」

少年は驚いた……まあ普通は驚くだろう死んでる人が歩いていたら。

「てかこの輪っか見えますの？普通の人には見えない様にしてくら
っているんですけど？魔法で。」

少年は魔法という言葉に反応した。

「魔法って!？ちょっとこっちへ来てください。」

少年は女性を連れて木が茂ってる人目がつきにくい場所に移動した。

「何故こんな場所に移動したのかしら？まあ話を聞かせてもらえら
なら別に何処だろうと構いませんが。」

「貴女は何故魔法を知っているんですか!？」

「私達の世界では普通に皆知っているからです。」

「私達の世界!？」

少年は女性の私達の世界という言葉が気になった。

「…私はこの世界の住人ではありませんのよ？異界人ですわね。こ
の世界の人達にとっては。」

少年はいきなりに聞いた事なので女性の言った事はすぐには信じら
れなかった。

「そんな事をいきなり言われても……。」

「まあ、普通はすぐに信じる事は無理ですわね。そうとうバカか柔軟性が高い人でないと。」

「そうとうバカっていりますか……?」

「口答えすると殴ります。」

「ええ!？」

少年は女性がそんな事をさらっと言ったの驚いてビビった。

しかし女性は少年がビビったのを無視して話を続ける。

「この世界にも魔法があるようですわね。しかし貴方の反応を見る限り秘密にしているようですわね。」

「あっ、はいその通りです。」

「じゃあそこでコソコソしてるネズミに聞かれてはまずいでしょうね。」

(えっ!?!バレてる!?!何!?!あの人!?!)

「誰か聞いてるんですか!?!」

「出てきなさい!」

女性はコソコソ聞いてる奴が隠れてる茂みに向かってそう言い放った。

すると茂みからオレンジ色の髪の毛のツインテールの女子学生が出てきた。

「……あんた魔法がどうか言ってたけどもしかして魔法使い!?!」

「い、いや違います……。」

少年は魔法使いと女子学生に言われて否定するが……。

「その顔は嘘をついてる顔ね!……ってことは朝のアレはあんたの仕

業ね！」

「ア、アスナさん感が鋭い!？」

「感が鋭いってことはやっぱり……。」

「あっ!?!しまった!?!」

少年は言っちゃったよと焦る……一方、女性は情報収集の会話がで
きなくてイラついていた。

「てめーら人の情報収集を中断させてんじゃないですわよ!まずは
私の話からですわ!」

「す……すみません……。」

「では貴方に聞きます!この世界は惑星間を行き来できる宇宙船は
ありますか?気は一般的に知られていますか?」

「え……惑星間を行き来できる宇宙船……気……?」

「その顔じゃ無しですわね……。」

「この人、何分かんないこと言ってるの?」

「人を頭おかしい人みたいに言わないでくださる?」

女性はアスナの言葉に対して少しイラつとしてアスナを睨む。

「でもあんた異界人とか言ってたし……中二病?」

ピキッ。

「誰が…中二病ですって……?」

女性はアスナの『中二病』と言う言葉に対して激しい怒りを見せた
……青筋が浮いている。

「だってあんた異界人とか言ってるし……それにまるでお姫さまの

様な服を着てるし……自分のことをお姫さまとか思いこんでんの？。

「

ピキッ、ピキッ。

「……私は真正正銘の姫ですわ。」

「漫画の読み……。」

ブウン……パアウー！！

女性は手に気を溜め木に向かって気弾を放った。

「誰が漫画の読み……ですって？」

「な、何あんた今何やったの！？」

「気をぶっぱ放しただけですわ……私は中二などでわなくマジなのですよ？」

女性はニッコリと笑いながらも威圧感を漂わせた表情をアスナに向ける。

「貴方とりあえず色々知ってそうな人の所へ案内してくださいませんか？」

少年に顔を向け女性は案内を頼む。少年は青ざめた顔をしていた……まあそりゃビビるだろう。

「が、学園長ならたぶん色々分かると思います……。」

「よし連れていきなさい。」

「は、はい……！」

少年はビビりながらも女性を連れて学園長の元へ向かった……アスナも一緒に何故か連れてきた少年が心配なのだろう。

「フオフオ……異界から来た人とは珍しいのーそれにネギ君この方は魔法も知っていると？」

「はい学園長確かそう言いました。それにこの人の世界では魔法は普通に知られているそうです。」

「フオフオ……かなり特殊な世界なんじゃのお。」

因みに魔法の会話をしていますがアスナは部屋の外にいます。

「じじい、この世界はどんな世界か早く教えてもらえるかしら？」

「じ、じじいって……その前に貴女の名前を教えてくださいんかのう……いちいち貴女やその方では面倒くさいじゃろう？」

「分かりましたわ、私の名はルーン＝アシユタリカ＝プラネット。ルーン姫と呼んでくださる？」

「ルーン姫殿じゃな？ワシの名は近衛近右衛門じゃ。」
「で？貴方は？」

ルーン姫は少年に名を聞く。

「僕はネギ＝スプリングフィールドです……。」
「ネギですわね。」

ルーン姫は少年の名をしつかりと覚える。

「ルーン姫殿はこの世界のことを知りたいんですけどな？この世界は魔法は秘密で……。」

「それは分かっているので別のことを。」

「え……じゃあ……。」

「とういかなんとなくもう分かったのでいいです。どうせ秘密利にだけど魔法使いが正義のためにとやらに動いてたりするのでしょう？この世界。」

「……………はい。」

学園長はルーン姫の理解力に度肝を抜かれた……そして思った……。

(なんでワシのそこへ来たの?)

と……。

「まあ魔法がある世界なら元の世界へ戻る方法もあるかもしれないので適当にさがしますか。」

「あ、ルーン姫殿ワシらが元の世界に戻る方法を調べて見ますから教員をやって見ませんか？」

学園長は突然ルーン姫に対してそんな事をきりだした。

「何故そんなことを急に？」

「魔法関連のことを勝手に調べられると問題がありましたのお………それにルーン姫殿は異世界の方なら変わった授業が出来るのではないかと思ひまして。」

学園長にそう言われルーン姫は一秒考えた後すぐに答えを出した。

「別にいいですわよ？そんなに急ぐことでもないですしね。それに

しても勝手に調べちゃいけないとか面倒くさい世界ですねー。」

ルーン姫は軽く学園長の案を承諾した。

「フオフオ……ではネギ君のクラスの副担として頼みますぞ。」

「えっ！？ルーン姫さん僕のクラスの副担なんですか！？」

「なにか嫌なことでも？」

ルーン姫ニツッコリ……しながらネギに聞く。

「いえ、別にありません。」

ネギはここでだって怖いからという本音を出さなかった……直感的に。

本音を出していたら殴られていただろう。

「ではルーン姫殿明日から頼みますぞ。」

「分かりましたわ……寝床は？」

「住む所ですか……うん。」

「思いつかないなら学園の敷地内に勝手に作りますわ。」

「え？家とか作れるんですか……まあいいでしょう()どうせ掘っ立て小屋ぐらいのレベルじゃな。」

学園長は後にその考えが甘かったと後悔する。

「じゃあさっそく取り掛かりませんと……ネギ先生明日からよろしくお願いいたしますわ。」

「は、はい。」

こうしてルーン姫はネギのクラスの副担になることが決まったのだ
った……ルーン姫はこの世界にどう影響を与えるのだろうか……。

プロローグ（後書き）

ルーン姫「ルーン姫のどうやったら強くなれるかコーナ！強くなり
たい人は是非私に聞きなさい！」

作者「まだ誰もいないんですけど……。」

ルーン姫「……はあ！」

ドッゴン！

作者「ごぼお！？」

ルーン姫「読者の皆さん次回もこの小説をお読みなさい！」

一時間目 副担ルーン姫は暴君！（前書き）

作者「学園長がかなり酷い目にあいます。

別に学園長が嫌いなわけではありませんよ。」

一時間目 副担ルーン姫は暴君！

チュン…チュン……チチチ。

爽快なまでの青空……ルーン姫はベッドから体を起こす。

「ん〜いい朝ですわ！早速行くとしましょうか。」

ルーン姫は自分が作った豪邸の様な家から麻帆良学園の自分が副担となったクラスに軽く朝食を食べ向かう……とつくに遅刻してる時間だったが。

「おはようございますわ。」

「ルーン姫さん！もうHR始まってますよ！」

「まあ別にいいじゃないですか？ちよつと寝坊したぐらい。」

「ダメですよ！」

ネギはルーン姫が遅刻したことを注意するがルーン姫は知らん顔をする。

「ちよつと貴女！ネギ先生の副担であるのにも遅刻をするとはどういうことですか！」

ネギのクラスのクラス委員長である雪広あやかがルーン姫に物申した。

「貴女……ちょっと私と喋り方を被らせるのやめてくれませんかしら?。」

いやそこまで被ってはいないと思われる。

「貴女と私じゃ全然違いますわ!。」

「わをつける所が被っているんですわ!。」

「け、喧嘩は止めてください!。」

ネギがルーン姫と委員長を止める。委員長はネギに言われたので大人しくなった。

「ネギ先生が言うなら……。」

「あら貴女のネギに対しての反応……もしかしてシヨタコン?。」

静まりかけた喧嘩の火種に油を注ぐルーン姫。
委員長は青筋を浮かべ頬をひくつくかせた。

「だ、誰がシヨタコンですってえ!!。」

「委員長がシヨタコンなのは同意(笑)。」

アスナがさらに油を注ぐ。

「ア、アスナさん貴女までえ〜!!。」

「間違ったこと言ってないじゃん?。」

委員長とアスナの喧嘩に発展しようとしていた。
ネギがオロオロ慌てる。

「あわわ…止めないと。」

「全く喧嘩なんてガキですわねえ。」

そもそもの発端はルーン姫だし。ルーン姫も喧嘩しようとしていたのだが…。

「ル、ルーン姫さん。喧嘩を止めてください!」

「じゃあないですわね…二人ともお止めなさい。」

ボカッ　ボカッ

ルーン姫は二人の頭をこづき喧嘩を止めさせた。

「いったあ!」

「痛っ!…ちよつと貴女体罰をいともたやすくやるとは教師としてどうなんですか!?!」

委員長がそうルーン姫に言うがルーン姫はだから何?という顔をしていた。

委員長の怒りはそんな態度を見てさらに増した。

「貴女教師としてふざけ……。」

「私はルーン＝アシユタリカ＝プラネットといたしますわ。これからこのクラスの副担になるのでよろしくお願いいたします。」

ルーン姫は委員長を無視して自分の自己紹介をした。

ルーン姫はどうやら委員長の相手をするのが面倒くさくなった様だ。

「委員長さん。ルーン姫さんが失礼なことをして申し訳ありません

……僕が担任として後でちゃんと書いておきますからどうかここは……。」

「ネギ先生……そんなにお気を使われなくとも……姫？」

委員長はネギがルーン姫に対して姫をつけるのが気になった。

「何故あのルーンという人に姫をつけているのですか？ネギ先生。」

「ルーン姫さんは本当のお姫さまらしいです。」

「本当の姫！？なんでそんな方が教師をしているのですか？」

「それはちよつと言えません……。」

ネギは委員長の問いに答えられなかった……そのことについて言う
と魔法のことにふれてしまうからである。

「ルーン先生ってお姫さまなの！？」

「何処の国のですか！？」

「姫が教師をしている……こりゃスクープだ！」

ルーン姫が本当の姫ということがクラス中に聞こえたためルーン姫
は質問せぬにあつが軽く一言で一掃した。

「うるさい。」

その一言は落ち着いてはいたが明らかに怒気がこもっていた。

ルーン姫は質問せぬがそうとうにうつとおしかった様だ。

「生徒にうるさいって……感じ悪いな。」

「質問答えたっていいじゃん。」

生徒達はルーン姫がうるさいと自分達の質問を一掃したことでルーン

ン姫のこゝろを感じ悪いと感じていた。

「うるさいと言つのは当然でしょう？一氣に質問せめにされれば？質問するなら一人ずつ一個までです。」

ルーン姫の言つことにも一理あつたので生徒達はルーン姫に氣をとりなおして質問する。

「ルーン先生はいくつですか？」

「忘れました。」

「ルーン先生は何処のお姫さま？」

「プラネットのです。」

「プラネットつて何処にあるんですか？」

「この世の何処かにはあります。」

「何処かじゃわかりませーん。」

「じゃあ自分で探さない。」

ルーン姫は生徒達の質問に対してきばきと答えていった。そしてクラスの大体が質問をし終えた。

「質問まだしていない人達はもういいのですね？」

「あ……あの……。」

「なんででしょうか？……あら？貴女はあの時の本の子ではないですか？」

「私、宮崎のどかです……あの時は助けていただいてありがとうございます……」

のどかはルーン姫に階段で落ちそうになった時助けてもらった時の礼を言つた。

「別に礼を言われるほどのことはしていませんわよ。でも助けてもらった相手に対して礼を言うことは大事ですわね。」

「はい、では皆さんこれからルーン姫先生をよろしくお願いしますね！」

ネギは生徒達に対してそう言ったが生徒達のルーン姫に対する印象はあまりよくなさそうだった。

五時間目の授業：ルーン姫が授業をしていた。教科は数学。

授業は上手くいかないと思われていたが……。

「で…あると言うことですね。まき絵さん分かりましたか？」

「分かりました！ルーン先生の授業って凄く分かりやすいです！」

「ふふ、そうですね！私は人になにか教えるのは大得意ですから。」

ルーン姫は人になにかを教えるのは得意分野だったのでバカレンジヤールのまき絵ですら分かりやすい教え方をしていた。

実際他の生徒も分かりやすいと感じている。

「ルーン先生教えるのめっちゃ上手っ！？」

「アスナはルーン先生の授業分かった？」

「スツゴい分かりやすいわ！」

「くっ、アスナさんですら理解できる授業をするとは…侮れませんかルーン先生。」

「ちよつと委員長、今の言葉引つ掛かるんだけど？」

アスナは委員長の言葉に対して反応し喧嘩が始まりそうになるが。

ボキユ！ボシユン。

ドサツ。

「私の授業中に喧嘩始めようとしてんじゃないですわよ。」

ルーン姫はアスナに向かってチヨークを凄まじい早さで投げていた。アスナの額に当たったチヨークは粉となり消え去った。そしてアスナは気絶して倒れてしまった。

「今度はどうどうと眠り始めましたか。たたき起こしてやりますわ。」

ルーン姫はアスナが居眠りをしたと思ったたたき起こそうとする。

ルーン姫が投げたチヨークが原因なのだが……。

「いや！？これアスナ気絶してます！？」

「気絶？どうしてですか？」

「たぶん先生が投げたチヨークが原因かと……。」

「あの程度の威力で気絶とは情けない……誰か一応アスナさんを保健室に連れておいきなさい。」

「あつ、はい連れていきます。」

保健委員の和泉亜子がアスナを保健室に連れて行った。

「全く……最近の（この世界）子はあの程度で……たるんでいますわ。」

ルーン姫のこの言葉に生徒達は大体全員こう思っただろう…。

(チヨークが粉々になる威力である程度!!!?)

と…

この後ルーン姫は気をとりなおして始めての授業を無事にやりとげた。

「授業ちゃんとやれてたじゃないですかルーン姫さん！アスナさんが何故か保健室に行きましたけど…。」

「あれはアスナが悪いんですわ。」

「誰が悪いって？」

アスナが怒った表情でルーン姫の後ろに立っていた。

やっぱりチヨークをぶつけられたことを怒っているのだろう。

「確かに私が喧嘩を始めようとしたのもちょっと悪いかもしれないけどさ…チヨークをあんな勢いよく投げないでいいんじゃない？」

確かにチヨークが粉々になる程の勢いで投げつけるのは普通はやりすぎというか普通はできない。

しかしルーン姫は悪びれた顔もせず言い返す。

「あの程度の威力で気絶する貴女が悪いでしょう？」

「なっ!？」

「私にとってあの程度の力は本つつつつ当つつつに手加減してやっているのですよ?」

「あれが手加減って…あんた一体どんぐらい力あるのよ!？」

アスナは一体ルーン姫はどれぐらい力があるんだと驚くがルーン姫はそれを無視した。

「じじいの野郎は少しは私が元の世界に戻る方法について進展はありましたかねえ…。」

「まだ一日しかたっていないませんよ…。」

ネギは昨日今日じゃさすがに無理だろうと思うのだが…。

「昨日今日だから少しの進展もないなんて私は許しませんわ。」

私は別に元の世界に戻るのを急いでいませんけどだからといって手を抜かれるのは腹がたちます。」

ルーン姫は昨日今日だから進展しない理由にならないとかなり無茶なことを言った。

たぶん学園長はまだ昨日今日だしと思っ元の世界に戻る方法を調べていないだろう。

御愁傷様 学園長…

「ちよつとじじいの所へ行って聞いてきますわ。」

ルーン姫はそう言って学園長室に向かっていった。

ネギはそれを見て大丈夫かな学園長……。

と思うのだった。

「言い残したいことはそれだけですか？」

ルーン姫が学園長に元の世界に戻る方法のことの進展を聞いたら学園長は案の定『えっ？だつてまだ昨日今日じゃん』と答えたのだ。

ルーン姫は当然その答えに激怒した。

「マジすんません……だから命だけは……。」

学園長はルーン姫に命乞いをする。

言い残したいことは言われて学園長は殺られると思っっているようだ。

「別に殺しませんわよ？」

ルーン姫のその言葉に学園長は一瞬安堵したが…。

「ただベッドの上で十年ぐらい喋れない状態にするだけです。」

「いや！？それもかなり酷い！？」

学園長はルーン姫の目を見てそれをやろうとしてることがマジだと分かったので更に恐怖した。

「ちよつと待つて！？……そうだ葉加瀬聡美ちゃんなら元の世界に戻る方法とかどうにかなるかも！」

「葉加瀬聡美？……ああ、ウチのクラスに確かいた子ですわね。」

ルーン姫は確かクラスにそんな子いたなと思いかえす。

しかしルーン姫は何故にその子が元の世界に戻る方法に関係するんですの？と思った。

「その子は天才でのうロボットとかも作っておる。」

「ああ、天才だからどうにかできると？」

「はい…そうですね。」

「考え方が安易すぎますわ！」

バキィッ！

ルーン姫は学園長を思いつきり殴りあげた。

学園長の安易な考えが相当にイラついたようだ。

「いぶう！？」

「まあ、でもとりあえずその子に会いに行きますか。」

だがルーン姫は何もしないよりはマシだということで葉加瀬の所へ行くことにしたようだ。

「結局行くならワシ殴らなくていいじゃん…。」

「何か言いましたか？」

ギロツ

ルーン姫は学園長を鋭く睨み付ける学園長はその威圧感になんでもありませんと答えるしかなかった…。

「さて、その子の所へ行きたいですが今は何処へいるんですかね？」
ルーン姫はもう今の時間帯だと生徒達は大体下校してるので葉加瀬は何処へいるのか学園長に聞く。

「麻帆良学園大学のロボット工学研究会にいますか？」
「じゃあ早速、行きますか！」

ルーン姫は葉加瀬の元へ行こうとするが…。

「あろう……。」

学園長が呼び止めた。

「なんですの？」
「家建てていいとは一応言いましたが……あのサイズはちょっと…。」

「ベッドの上で十年。」
「なんでもありませんでしたあー!!！」

学園長はルーン姫に屈服するしかなかった。

ルーン姫はくだらないことで引き止めないでくださる？という顔を
したあと麻帆良大学部に向かった。

「ルーン姫殿……暴君すぎじゃ。」

「ここが麻帆良大口ロボット工学研究会ですか…。」

ルーン姫は辺りにあるロボットを見て思った…。

「レベル低っ！あつ、口に出ましたわ。」

思わず口に出してしまったルーン姫。

当然この言葉にも申す人はいるだろう。

「レベルが低いつて失礼ですよ！」

このルーン姫にも申した人物は葉加瀬聡美。

ルーン姫が現在探している人物だ。

「探す手間が省けましたけど…この程度の科学力では期待できませんわね。」

天才が関わっているというものだから期待してみればこの程度ですか。」

ルーン姫は更に相手を煽る言動を放つ。

「この程度つて…じゃあ貴女には何かできるんですか！」

葉加瀬はさすがにキレた。

まあ…こんなに言われれば当然だろう。

ルーン姫は葉加瀬の言葉に平然とした顔をして答える。

「できますわよ？この程度の科学より上の物を作る事なら？」

「じゃあやってみてください!？」

「じゃあやります。」

ルーン姫は設備や材料を勝手に使い何かを作り始める。

足りない材料は学園長名義で取り寄せていた。

後で学園長がルーン姫殿マジ酷い!？と言つのが目に浮かぶ。

「よし!完成しましたわ。」

ルーン姫は自分の作りあげた物を見ていいできですわ。

…と満足する。

葉加瀬はルーン姫の物を作る過程を見ていたが理解できないことが多かった。

つまりルーン姫は葉加瀬よりも上ということになるのだ。

「それは一体何ですか!？」

葉加瀬はルーン姫が作ったものが何かを聞く。

葉加瀬の目は輝いていた。

自分にとって分からない技術で作りあげられたものが気になるのだろっ。

科学者なら当然の反応である

「惑星間も普通に行き来できる宇宙船ですわ。

生体反応をキャッチして生命が住んでる星を探せる機能もつけてますわ。

当然、お風呂もトイレも完備していますわ。

あと重力トレーニングもできるように重力コントロール装置もつけてますわよ。」

ルーン姫が作った宇宙船は明らかにこの世界の科学レベルを越えたものだった。

葉加瀬はルーン姫が作った宇宙船の機能を聞いて目を更に輝かせた。

「広い宇宙の中で生体反応をキャッチ!? 惑星間を普通に行き来できる宇宙船!? ……ということは宇宙人に普通会えちゃうじゃないですか!？」

葉加瀬は興奮覚めやらなかった。

これだけのことを聞けば当然か。

科学者じゃなくてもワクワクすると思うし。

「それにしてもこんな技術を持つてるなんて……ルーン先生、貴女は天才科学者ですか!？」

「いや、私は科学者じゃないですけど? 私は姫ですわ。」

「お姫様が普通は宇宙船なんて作れないと思うんですが?」

葉加瀬のその言葉にルーン姫はふふんとして答えた。

「私が宇宙船を作れる理由: それは私が幼い頃に自分の星を抜け出して別の惑星にいき悪の組織を潰してまわって遊ぶためですわ。」

ルーン姫はかなりあれなことを笑顔で言った。

宇宙をまわって悪の組織を潰して遊ぶ……そんなことをする姫はルーン姫以外に存在しないだろう。

「普通、お姫様はそんな遊びしないとします!？」

葉加瀬は当然の反応をした。

悪の組織を潰す遊びをするお姫様なんていないそれが普通のことだし。

「大臣も同じようなこと言ってましたわねえ。」

それで何故か私が星に帰る度に大臣の奴お腹押さえてましたわね？」

姫が悪の組織潰すとかいう遊びをすれば当然である。

大臣の胃のライフはルーン姫が悪の組織潰す遊びに行くたびに削られていったんだろう。」

「では、葉加瀬さんちよつと一緒に宇宙船に乗ってみましようか？見るだけではその性能が本当か分からないでしょう？」

「そうですね。確かに実際に体験してみないと。」

「じゃあ乗りましょう。」

ルーン姫は葉加瀬の腕を掴み宇宙船の中に入り込む。

「飛び立つ前の準備しなくていいんですか!？」

「近場に行くだけだから大丈夫ですよ。」

たぶん。」

「たぶんって!？」

近場と言ってもこの広い宇宙では時間は凄くかかる筈なので葉加瀬は不安になる。

しかしルーン姫は葉加瀬のそんな不安など無視して普通に飛び立った。

「宇宙の藻屑になったらどうしよう…。」

葉加瀬はそんな風に暗くなっていたが。

「つきましたよ。」

「えっ!?!はやっ!?!」

葉加瀬は地球を飛び立ってから間もないにもうついたことに驚いた。

「地球から一番近い星に範囲を絞ったのですから早くて当然でしょう?」

「それにしたって早すぎです!?!」

葉加瀬がそれにしたって早すぎと言うのは当然である。

惑星間の移動が一瞬で終わるのは、どう考えたって普通はおかしすぎるだろう。

そうこの世界にとっての普通は。

「この星は酸素とか普通に大丈夫だから外にでて平気ですよ。

葉加瀬さん。

まあ私は何処でも平気ですけどね。」

ルーン姫は外の環境を調べて葉加瀬に外にでて平気だと言う。

ルーン姫が何処でも平気と言うのは恐らく死人だからと言う意味ではないだろう。

だってルーン姫だし。

「ん？…気が消えてますわね。
葉加瀬さん。やっぱり貴女は宇宙船の中にいなさい。
死にたくないなら。」

ルーン姫は真面目な顔をして葉加瀬にそう言うが。
葉加瀬はルーン姫に対してこう言った。

「未知が目の前に迫ってるんですよ！危なくたって私は外にでますよ！」

ルーン姫はちよっと考えたが…まっ、いつかと決断した。

「この程度の力の奴なら葉加瀬さん守りながらも戦えますしね。
じゃあ葉加瀬さん連れて気の消えてる場所に向かいますか。」

ルーン姫は葉加瀬を掴むと気の消えてる場所にへと飛んでいった。

「ルーン姫さん飛べたんですか!？」

ルーン姫は当然、葉加瀬のそんな言葉を無視する。

「さっさとこの世を全て汚くするすべを書いた本を渡すんだ。」
「我らクツリーン星人がこの世の汚れに対抗するために調べあけた世の中のものを汚くする方法が書かれた本を貴様らドロツへ星人に渡したらこの世のあらゆるものが汚されてしまうんだ。
渡せるものか。」

「汚れた世界：想像するだけで心地いいじゃないか。」

「いや、心地悪いですわ。」

「なんだ貴様!?!」

「まず自分から名乗りなさいな。」

ルーン姫はまず宇宙人に名乗れという。

宇宙人はふふ…と笑いながら自分の名を語る。

「僕はこの世を汚くする宇宙の帝王ドロローゼ様だ!」

ルーン姫はふーん…ぐらいの反応をした。

ドロローゼは若干不満そうな顔をした。

「この僕が自己紹介をしたのにその反応…ムカつくね。」

「ルーン先生、あの宇宙人。不機嫌そうですね!?!」

葉加瀬はルーン姫がドロローゼに対して挑発的な態度をとるのを心配した。

相手は宇宙人だ。怒らせるとどうなるか分からないからだ。

「さつさとこの星から消えなさいな。」

クズ野郎ども。」

ルーン姫はドロツへ星人達に対してそんな発言をかました。葉加瀬は挑発的すぎますよ!?!とルーン姫に対して思った。

「ふう…身の程知らずだね。君は…殺れ。」

ドロローゼは部下にルーン姫を殺すように命令した。

部下はルーン姫に対してエネルギー弾を放とうとする。

「戦闘力たったの五、ゴミだな死ね！」

部下はルーン姫の戦闘力を機械で測ったあとルーン姫をゴミだと馬鹿にしてルーン姫にエネルギー弾を放った。

…だが。

「誰がゴミですか。」

ルーン姫は片手で軽くエネルギー弾をはじいた。

ドローゼの部下は驚いた表情になった。

戦闘力五のゴミと思った奴にエネルギー弾をはじかれたのだから。

「なに！？」

「はあ！」

ルーン姫は凄まじいスピードでドローゼの部下たちを一瞬で倒した。

「中々やるようだね君。どうだい？僕の部下にならないかい？」

「お断りですわ。」

「じゃあ死ぬしかないね。」

ドローゼはルーン姫に対して指からビームを放った。

…だが。

「この程度で死にませんわよ。」

ルーン姫は軽くビームを握りつぶす。

「なっ!?!」

「何が起こってるんですか!?!」

ドローゼはいともたやすくルーン姫に攻撃を潰されたことに驚いた。葉加瀬は何が起こっているか理解できていないようだった。

「じゃあさっさと貴方を倒しますか。」

ルーン姫は手をコキコキ鳴らしながらドローゼへゆっくり近づく。

「今が僕の全力と思うなよ!はああ……。」

ドローゼは姿がどんどん変わり力が増している。ルーン姫はただそれをじっと見ている。

「今のうちに倒さないんですか!?!」

「葉加瀬さん。私があ程度の小者に対してそんなことをするわけないでしょう。」

葉加瀬はルーン姫にドローゼが姿を変える最中が一番の倒すチャンスなのではというが、ルーン姫はなんであんな小者にそんなセコいことをしなくてはならないと返した。

「ふふ…僕が本当の力を見せる前に倒さなかったことを後悔するがいい!?!」

ドローゼがさういってドローゼの変身が終わった。ルーン姫はやっと終わりましたかという顔をした。

「見せてやるぞ僕のフルパワー!!」

と意気込んだドローゼだったが……。

「ぐああああ!？」

一撃でルーン姫にやられたあとルーン姫にサンドバックがわりに殴られていた。

「飽きた。」

そう言ってルーン姫はドローゼを投げ捨てる。

「もう許さんぞ!!!この星ごと消す!!!」

ドローゼはそう言ったあと宙に浮かび巨大なエネルギーの塊をつくりだす。

「この星ごと消えてなくなれ!!!」

そう言ってドローゼはエネルギーの塊をルーン姫に向かって投げつけるが。

「か・め・は・め・波!!」

かめはめ波でエネルギーの塊ごとドローゼをぶっ飛ばした。

「ぎええええええ!!!?」

「もう汚くするのはやめます……。」

「分かればよろしい……すみませんね貴方達こいつのことを恨んでいるのに殺さなくて……でも殺せばいいと言っわけではないですし。」

ルーン姫はドロージェとその部下達を殺してはいなかった。

ルーン姫は別に残虐……ではないし非道……でもないのだから。

(今なんかムカつきましたわね……。)

「いいのですよ……確かにそいつらは我が同胞達を殺しました……だからといってそいつら殺してしまえばそいつらと同類です。」

クツリン星人の長老はそう言った。

まさにその通りである。

「貴方達!これからはこの宇宙のために働くのですよ!それが貴方達の償いです!」

ルーン姫は威風を漂わせドロツへ星人達にそう言った。

ドロツへ星人達はその言葉をちゃんと胸に収め自分達の星に帰って行った。

クツリン星をたてなおすドロツへ星人を残して。

「「「……あのう。」」」

残されたドロツへ星人は不安だった。

クツリーン星人は星を荒らした自分達を受け入れてくれるのかと…。

「……早速この星のために働いてくれい……頼みますぞ。」

クツリーン星人の長老は残されたドロツへ星人達に早速働いてくれるように頼んだ。

ドロツへ星人達は早速働こうとする。

「働き終わったら一緒に食事をしましょうぞドロツへ星人の皆さん。」

長老はドロツへ星人達に向かってそう言った。

「「「!?!?……はい!」」」

ドロツへ星人達はその言葉を聞くとはりきって仕事にとりかかった。

「長老何故あんなことを!?!?」

「憎しみは連鎖させてはならんだ……貴方もそう思いなのでしようルーン殿。」

「ええ、その通りです。」

罪を償う意識を持つものに対しても憎しみを持つのは愚かですし。」

ルーン姫はきつぱりとそう言った。

「私とはんでもない悪党だった奴が改心した状態を見たことありますしね。」

「ドローゼもちゃんと改心するのですかね…?」

「するんじゃないんですの?」

また悪さしたら今度は死んだ方がマシぐらいなことに合わせるから安心しなさいな。」

ルーン姫は笑顔で長老に対してそう言った。

…と同時に長老は思った。

(ルーン殿…目がマジだ…ドローゼ絶対もう悪事しないわこれ。)

ルーン姫の恐ろしさをじかに感じたであろうドローゼはもう悪さしないと思う長老だった。

ルーン姫は軽く背伸びをすると葉加瀬の方を見て言った。

「帰りますわよ。」

「でもこの星にしかないことを調…。」「帰りますわよ?」

ニツコリ笑いながらルーン姫は葉加瀬に対してそう言った。

目は笑っていないなかったが。

葉加瀬はそんなルーン姫に対して『はい、帰ります』としか答えられなかった。

「地球に帰って来ましたわね…：…なにか私、忘れてる気がするの

ですけど？……まあいいですか。」

ルーン姫は当初の目的の元の世界に帰る方法のことなどすっかり忘れていたようだ。

「この宇宙船は世界に発表すれば受賞ものですよ！」

「でもこれ私の物だから発表なんかできませんけどね。」

ルーン姫はきつぱりと葉加瀬に言った。

そうですよね…と葉加瀬はガツカリとした。

「ルーン先生……これちょっと調……」

「べさせませんわ。自分で頑張って研究してここまでの物を作りなさいな。」

ルーン姫は調べさせないときつぱり断った。

自分に得がないからである。

「じゃ、宇宙船を持って家に帰りますか。」

ルーン姫は宇宙船を持って自分の家に帰っていくのだった。

「うっ……凄い技術が……。」

葉加瀬は凄い技術を知りたかったと落ち込んだ。

その頃ルーン姫によって割りを食った学園長は…

「なんでこんなに請求書が！？…まさかルーン姫殿が！？ルーン姫

殿マジ酷い!!?」

学園長は大量の請求書に囲まれて苦しんでいたのだった。

ルーン姫はきつと請求書のことをあとで言われても無視するのだろ
う…。

一時間目 副担ルーン姫は暴君！（後書き）

ルーン姫「ルーン姫の強くなりたいたら私に聞きなさいコーナですわ！」

作者「まだバトルパートとかないんで無理ですよ…。」

ルーン姫「…ですわね。」

ドロージェ「私が来ましたよ！」

ルーン姫「…バトルパートはいつですかねえ。」

作者「ドロージェさん無視していいんですか？」

ルーン姫「…ちっ。」

ドロージェ「ちっ…とか言わないでもいいじゃないですか！」

ルーン姫「帰れ。」

ドロージェ「そんなことを言わなくても…私は自分の戦闘力を言いにきたんです。」

私の最大戦闘力は3000万です。」

ルーン姫「あっ、そう。言ったならとつと帰れ。」

ドロージェ「冷たすぎですよ…。」

ルーン姫「読者の皆さん次回もこの小説を読みなさい！そして私に

聞きたいことがあるなら感想で聞きなさいな。」

ドローゼ「作者さん私の次の出番は？」

作者「99.9%ありません。」

ドローゼ「えー！！？」

二時間目 ネギの相談、即解決（前書き）

今回の話しは短めです。

二時間目 ネギの相談、即解決

「いやー、今日も授業面倒くさかったですわ。」

ルーン姫は今日も授業を無事におえ家に帰る準備をしていた。

先生として授業面倒くさい発言はどうかと思うが。

ルーン姫なので仕方がないだろう。

ルーン姫が家に帰って何をしようかと考えているとネギが話しかけてきた。

「あー、ルーン姫さん。ちょっと…」

「面倒くさいから嫌ですわ。」

ネギがルーン姫に何か言いおえる前にルーン姫は面倒くさいから嫌と答えた。

ネギはまだ全部言っていないのに!?!
となっていた。

「じゃあ私は帰って遊びますので。」

「帰って遊ぶって…元の世界に戻る方法はいいんですか?」

ネギはルーン姫が元の世界に戻る方法は学園長が調べると確かに言ったけど元の世界に帰りたいたいなら自分で調べようとしなのかな?と考えた。

ルーン姫はネギの考えてることが分かるところで答えた。

「学園長が調べると言ったので私は全部学園長に任せる気なので
よ。」

ルーン姫のこの言葉を聞いてネギはルーン姫は学園長のことを信頼してるのかな？

と思ったがそれはすぐにぶち壊される。

「自分で調べるのはぶっちゃけダルいので学園長に全て押しつけた
いんですわ。」

この人はただ面倒くさいから自分で調べようとはしていなかったんだとネギは理解した。

ネギはルーン姫が面倒くさいから学園長に押しつけたという言葉はとりあえず忘れて自分が相談しようとしたが最初にかきけされたことを言う。

「ルーン姫さん。僕、アスナさんに魔法のことが完全にバレたんですけど…どうしたらいいでしょうか？」

どうやらネギはルーン姫が宇宙船やらやってる間にアスナに魔法のことが完全にバレていたようだ。

「帰ったらずは紅茶でも飲みますか。」

ネギの言葉を見殺しルーン姫は帰って紅茶を飲むことを考えていた。ネギの魔法がバレたことなどルーン姫にとってはどうでもいいようだ。

「無視しないでくださいよ!?!?!ルーン姫さん。どうしたらいいでしょうか?」

「バレたならバレたでいいんじゃないのです？」

「

ルーン姫は深刻な顔をするネギに対して本当にどうでもよさそうな顔をしてそう言う。

ネギはルーン姫のその言葉に対して全然よくないですよ!？」

と思うが、ルーン姫は全くそんなネギを気にせずさっさと帰ろうとする。

ネギはそんなルーン姫の態度を見て思いきつてあることを言う。

「アスナさんに魔法がバレたことをどうにかしてくれたらルーン姫さんの言うことをなんでも聞きます!！」

ルーン姫はネギのその言葉を聞いて少し考える。

自分がネギに対して言うことを聞かせたいことなど特になかったが、あることを思いついたのでルーン姫はアスナにネギの魔法がバレたことをどうにかしてやろうと考えた。

「分かりました。私がどうにかしましょうじゃないのです。」

「本当ですか!?! やったあ!！」

ネギはルーン姫がアスナに魔法がバレたことをどうにかしてくれると分かって喜んだ。

そしてルーン姫はネギとともにアスナの元へと向かう。

「ネギの魔法のことは絶対に他人にばらさないようになさい。」

ルーン姫はいきなりアスナに対して上から目線でそう言った。

「私がネギの魔法のことをばらすかどうかなんてルーン先生には関係ないじゃないですか？」

アスナはルーン姫の上から目線も気に入らなかったのか若干機嫌が悪そうにそう言う。

「お願いです。アスナさん。魔法のことはどうか内緒に……。」

「どうしよっかな。」

ルーン姫はアスナの上から目線の態度にキレた。

さっき自分がしていたことなのに。

「人の弱みを握っているから、上から目線の態度……ム力つきますわ！ちよつと表に出なさい。」

「えっ！？ちよつと……。」

ルーン姫はアスナに有無を言わずに何処かに連れて行った……。しばらくして。

「あつ、ルーン姫さんと……アスナさん？」

ネギは戻ってきたアスナの顔が恐怖に怯えていることがとても気になった。

「ネギ……魔法のことは……ばらさないから……安心して……。」

アスナは力のない言葉でそうネギに言った。
ネギはアスナの今の状態が気にはなるが魔法のことがばらされる心配がなくなっなのでひとまず安心した。ルーン姫はニッコリ笑いながらネギを見る。

「ネギ、約束は覚えていますわよね？」

「あっ！」

ネギはルーン姫にアスナに魔法がバレたことをなんとかしてくれらなならんでも言うつことを聞くと言ったことを思い出した。

「えーと……僕は何を聞けば？」

「今はいいです……今はね……。」

ルーン姫は深みのある言葉でそう言うがネギは気づかずに今はいいのかぐらいしか思っていなかった。

これが後に自分を変えてしまうきっかけだったとは知らずに……。

二時間目 ネギの相談、即解決（後書き）

ルーン姫「今回の話し短いすわね。」

作者「今回の話しはあることへのふせんですね。」

ルーン姫「ああ…」

作者「言っちゃダメです！」

ルーン姫（どうせ皆さん分かっているとありますけど…）。

作者「この小説を読んでくれた読者の皆様。次回もどうか読んでください！」

ルーン姫「私の活躍を楽しみにしなさい！」

三時間目 図書館島とルーン姫（前書き）

作者「今回も学園長が酷い目にあってるような……。」

三時間目 図書館島とルーン姫

ルーン姫が教師になってからしばらくたった…。

今は期末テストが近くなっただためか？ A以外のクラスはピリピリしていた。

「うちのクラス以外はピリピリしてますわねー。」

「期末テストが近いからですよルーン先生。」

「ふーん。そうですね。」

ルーン姫は特に期末テストに関しては興味がないようだった。

自分のクラスを一位にしようとかは思わないらしい。

しばらくするとネギがHRを始め期末テストへ向けて大・勉強会をはじめようと言いだした。

（ネギの奴、妙にやる気だしてますわねえ…。）

ルーン姫はネギが自分のクラスに一位をとらせたいからやる気を出す…というものとは違うものを感じた。

（まっ、どうでもいいですか。）

しかしルーン姫はネギの妙なやる気はどうでもいいと気にしないことにした。

ルーン姫がしばらく様子をボーッと見ているとクラスの面々はアホな勉強法をやったりしていた。

ルーン姫はそれを見てこのクラスに学年一位なんてほぼ確実に無理ですわね…と思った。

「なにか面白いものは、ありませんかねー。」

今日の夜、ルーン姫は図書館島を探検していた。

ルーン姫島がこの場所を知っているのは学園長に本がたくさん読める場所はないんですの？…と聞いて知ったのだ。

ルーン姫が図書館島を探検しているのは何かありそうだったからである。

しばらくしてルーン姫は図書館探検部しか知らない秘密の入り口を見つけた。

「おや？いかにもな入り口が…人がほんのちよつと前に通った形跡がありますわね。」

…行ってみますか。」

ルーン姫は秘密の入り口を通り図書館島の地下へと向かって言った。

(たく…ネギの奴、魔法が使えないから本当に足手まといよ…。(

図書館島に魔法の本を探しにきたバカレンジャーの一人アスナは食事を取りながらそんなことを考えていた。

バカレンジャーが図書館島に魔法の本を探しにきた理由は次の期末テストで特に酷い点数をとったものたちは小学生からやり直しという噂を聞いたからである。

事実ではなくただのデマだが。その変わりネギがクビになるが…。

「ポテチ貰ってもよろしいですか？」

「あつ、いいよ…って！？ルーン先生！？」

まき絵はルーン姫がいたことに驚いた顔をする。

ルーン姫は、なにをそんなに驚いてるんですの？…という顔をしながらポテチを食べていた。

「なっ、なんでルーン姫さんが！？」

ネギはルーン姫がここに何故いるかを聞いた。

ルーン姫はポテチを食べおえると答えた。

「図書館島を探検していたからです。」

ルーン姫はそうあっさり答えるが、夕映がルーン姫にあることを聞いてきた。

「ルーン先生はどうやって図書館島探検部しか知らない秘密の入り口を見つけたのですか？」

…と

ルーン姫は夕映のその質問に対して一応答えた。

「なんとなく見つけました。」

「なんとなくって…。」

「世の中なんとなくで大抵のことは、どうにかなるものです。」

ルーン姫はそう言うとオニギリに手を伸ばし食べ始めた。

まき絵があることに気づく。

「ルーン先生、ここまで来たってことは図書館島のトラップをくぐり抜けてきたんですか？」

まき絵はルーン姫が図書館島地下のトラップをくぐり抜けたことが気になった。

まあ普通の先生がトラップをくぐり抜けるのは、おかしいだろうし…普通の先生は。

「あの程度でトラップなんて笑わせませすわ。

灼熱の業火が噴き出したりビームが色々な角度から放たれたり死の呪文が急に聞こえたりぐらいはしないとトラップなんて呼べませすわ。」

ルーン姫がそう言つとまき絵は。

「RPGじゃないんだからそんなのありませんよルーン先生。」

…と言つたがそれに対してネギは。

「図書館島のトラップも充分RPGです…。」

…と言った確かにその通りである

ルーン姫が現れてからアスナの顔が妙に青くなっていた。
ネギはそれに気づきアスナに声をかける。

「アスナさん。どうしたんですか？」

「いや……ちよつとね……。」

「ああ、もしかしてあの時のことを思い出しているんですの？」

ルーン姫はネギの魔法がアスナにバレた件をどうにかするためにしたことをアスナは思い出しているのではと思った。

ルーン姫がそのことを言うとアスナは頭を抱えて叫び始める。

「いやあああああ！！もうやめてえええええ！！喋りませんか
らあああああ！！！！」

アスナは、あの時のことを思い出して錯乱した。

ルーン姫は仕方ないのでアスナを手刀で気絶させた。

「ふう…静かになりましたわ。」

「ルーン姫さん…アスナさんに、なにをしたんですか？」

ネギはアスナが錯乱したのを見てルーン姫がアスナに、なにをした
が気になったが…

「聞いても後悔しませんか？」

…とニツコリしながら言われたので…

「やっぱりいいです。」

…と答えた。

聞いたらなんか後悔してしまいそうだったから。

「アスナ、急にどうしたんだらうね？」

「まき絵さん。どうせ思春期特有の恥ずかしいことを思い出して、ジタバタしただけですからほっときなさい。」

「そうなんですかー。」

「今のは恥ずかしいことを思い出して、ジタバタとかじゃなかったと思うのですが…。」

夕映はアスナのあれは恥ずかしいことを思い出してなったようには見えなかったがとりあえず今は、そのことをおいとくことにした。

「ところで貴女達はここでなにをしていますの？
お宝探しですか？」

ルーン姫はそうバカレンジャー達に聞いた。

頭が読むだけでよくなる魔法の本を探しにきたのだからルーン姫の言ったことは、あながち遠くはない。

「読むだけで頭がよくなる魔法の本を探しにきたんです。」

「読むだけで頭がよくなる本？」

…ああ、貴女達バカだからその本を使って期末テストでいい点をとろうというわけですね。」

ルーン姫はバカレンジャー達に向かってそういう。

まんまその通りであった。

「しかしそんなものに頼らずに地道に勉強していい点をとろうとは思わないんですの？」

「えへへ、私達バカなので。」

「…まあ、だからそんな本を頼るわけなんでしょうけどね…。」

ルーン姫は、そもそも地道にやる奴が魔法の本なんて頼らないかと思っただ。

「ん〜…あれ、ここは？」

気絶していたアスナが目を覚ました。

しかし気絶したせいで少し記憶が混乱しているようだ。

「あつ、アスナさん。目が覚めました？」

「ネギ…ここは何処？私なにしてるの？」

「貴女は自分のバカな頭をどうにかするために、魔法の本を探しに図書館島の地下に来ているのですよ？」

ルーン姫は記憶が混乱しているアスナに対してここにいるわけを説明する。

さらっと失礼なことを言った気がするが気にしないでおこう

「そう言えば私、魔法の本を探しに来たんだった！？」

アスナはルーン姫に言われたことで完全に記憶が回復したようだった。

「しかし魔法の本ですか…いい暇潰しが見つかりましたわね。」

ルーン姫は暇潰しに魔法の本を探すことに決めた。

なのでルーン姫はネギ達とともに行動をとることを決める。

「貴女達、私も一緒に魔法の本を探してよろしですか？」

ルーン姫はそうアスナ達にそう聞かすが、たぶん断つても無理矢理ついていくだろう。

「ルーン先生は、なんで魔法の本を探したいんですか？」

「ただの暇潰しです。」

ルーン姫は、まき絵の問いにそう答えた。

皆は、あっそうですかと思うしかなかった。

魔法の本を探す理由がただの暇潰しじゃね……。

「では皆さん。休憩はここまでにして、さっさと先に進みましょう。」

何故かルーン姫が皆を仕切る。

いつの間にかルーン姫がリーダーのように振る舞う。

皆は当然なんで貴女がいきなり仕切っているんですか？

…と思ったろうがルーン姫が威圧感のある笑顔でほら早く先に進みましょと言ったので何も言えなかった……。

ルーン姫はアスナ達を連れ図書館島の地下深くへと進む。
途中様々な難関があったがルーン姫は普通に突破する。

そしてルーン姫は達はラスボスの間のような部屋にたどりいた。

「立派な部屋ですわね！」

私の城の部屋の方が立派ですけどね。

おや？あそこに本が置いてますわね。」

ルーン姫は本が台座の上に置かれているのを見つけた。

ネギがルーン姫が見つけた本を見ると驚いた顔をした。

「あれは伝説のメルキセテクの書ですよ！！あれは最高の魔法書ですからちよつと頭を良くするぐらい簡単かも…。」

「最高の魔法書ねえ…。」

ルーン姫は自分が知りうる魔法書よりあれは優れているのかと考えるが自分の仲間の魔導士の書いたものよりどうせ凄くないだろうなと思った。

「本は発見したので私はもう帰りましょうかね…。」

ルーン姫は宝探しは探す過程が面白いのであって宝自体はどうでもいいと思ってるタイプなので本を見つけた今、凄く帰りたくなった。

ルーン姫が帰ろうと考えているとネギ達が魔法書の元へ向かっていたが…。

ガコン！ バカソツ

ネギ達は畏に、はまった。

「バカみたいに近づくから畏にかかるんですわ。」

ルーン姫はとりあえず畏にかかったネギ達の元へ近づく。

ルーンがネギ達の落ちた場所を見るとツイスターゲームの上にネギ達はいた。

ルーン姫がなんでツイスターゲーム？と思っていると…

「この本が欲しくば……わしの質問に答えるのじゃーフオフオフオ。」

石像が急に動きそうアスナ達に言ってきた。

ルーン姫は石像の声がどこかで聞いたものであることに気づき石像の正体がすぐに分かった。

（じじいですわね。）

石像の正体が学園長であることにルーン姫は気づいたが特に何も言わないようだ。

言わないのは単に興味がないだけかもしれない。

「ーでは第一……」

バゴォ！

ルーン姫は石像が何かを言いおえる前に飛び蹴りを食らわせた。

ルーン姫が飛び蹴りを食らわせた理由それは…

「がたがた言わずに本を渡しゃいいでしょうが。
面倒くさい。」

学園長がグダグダやるのが面倒くさいだけだった。

「フオ…ひっ、酷い。そんな理由で蹴らなくても…。」

「なんか文句ありますか!!！」

ダンッ!!!

ルーン姫はそう言って地面を思いっきり蹴った。

威嚇行動のつもりでやったのだろうか…。

ピシ…ピシ…ピシッ。

「あら?…力加減をちよつと間違えましたわ。」

ルーン姫が力加減を間違えたせいで地面にヒビが入りそして…

バカン。

砕けた…そしてルーン姫達は地下深くへと落ちていった。

「ルーン先生、なにやってんのー!?!」

「いやあ、やつちゃいましたね。」

アスナに責められるが悪びれることなくそう言う。
ルーン姫は反省はしてないようだ。

「やつちゃったじゃないですよ!?!」

「まあ、更なる地下を探検できるから結果オーライと言うことで。」

ルーン姫がそう言うとネギは全然結果オーライじゃないですよと思
ったがルーン姫に言う前にネギ達は墜落した。

「う……ここは?」

ネギが目を覚ますと見知らぬ空間が広がっていた。
そしてなんか聞こえてきた。

「誰にも発見されない場所、絶望エターナル、見知らぬ空間、恐
怖エターナル」

ルーン姫が変な歌を歌っていた。

ネギは、シヤレにならない感じがする歌だと感じた。

…現状が現状だから。

「おや?ネギ目が覚めたんですの。」

ルーン姫はネギが目覚めたことに気づくと歌うのをやめる。

「ええ…目は覚めたんですけど…今はちょっと気分がブルーな感じですよ…。」

「悪夢でも見たんですの？」

貴女の歌のせいですとは口がさけても言えないネギだった。言ったら酷い目にあわされそうだから…。

「そう言えば私がこの歌をなんとなく歌ったとき『この状況じゃシヤレになんねえんだよ!!』…と言われたことがありましたねえ…。」

ネギは思った。

ルーン姫を相手に、どうどうとそんな言葉を言える人は勇者だと…。

「まあ、今の状況はその時の状況と比べるまでもなく全然ヤバくないですわね。」

「いや!?マズイですよ!だってここ知らないとこだし…。」

「大丈夫、生命エネルギーを常に吸いとられる空間と比べたらここは楽園ですよ。」

「いや、そんな凄い空間と比べられても…。」

ルーン姫とネギが会話をしていると他のメンバーも全員、目を覚まします。

「うーん…ここは?…ってなんなのこの場所!？」

目を覚ましたアスナはこの場所を見て驚く。

落ちてきた天井が凄く高いことと地下なのに明るいことが主な要因だろう。

「ここは幻の地底図書室!？」

「なんですのそれ？」

ルーン姫は地底図書室というものについて夕映に聞く。

ルーン姫は地底図書室について少し興味がわいたようだ。

「地底なのにあたたかい光に満ちて数々の貴重品にあふれた。本好きに突破するとしてはまさに楽園という幻の図書館…。」

「ふーん…。」

「ただし、この図書室を見て生きて帰った者はいないとか。」

夕映はちよつと凄みをきかせてそう言うが。

「生きて帰った者がいないなら貴女が知ってるわけないでしょうが。いい加減なことを言っていると殴りますわよ?。」

ルーン姫にマジ返しされた。

夕映は、ちよつとした冗談のつもりだったのにルーン姫にマジ返しされてビビる。

夕映は気をとりあえず直してここが脱出困難であることは確かだと皆に伝えた。

「ど、どうするアルか？それでは明後日の期末テストまでに帰れないアルよ。」

「それどころか私たち、このままおうち帰れないんじゃない？」

ルーン姫以外の者たちは今の状況に動揺したり焦っていたりした。

ルーン姫はこの地下なにかあるかなと考えていた。
のんきなものである。

「まあ、とりあえずこの場所を探検しましょうか。」

「確かに今はこの場所を探索し出口を探すべきですね。」

ルーン姫の言葉で夕映はこの場所を探索し出口を探すのが先決だと考えた。

…ただしルーン姫は探索ではなく探検と言っているので意味合いが違うが…。

ネギ達は出口を探しこの場所を探索する。

そしてルーン姫は、なにか面白いものがないかと探検する。

ルーン姫だけ遊び気分だった。

生徒のことを思っ出口を一生懸命探すとかは…しないかルーン姫だし。

「だ、だめですね。やはりどこからも登れないようです。」

「こっちも面白いものが特に見つかりませんでしたわ。」

ルーン姫のその言葉にアスナが怒る。

「ちょっと！ルーン先生が床を壊さなきゃこんなことにならなかつたんだからマジメに探してよ！！！」

アスナのその言葉にルーン姫は反論する。

「確かにここに来たのは私が床を壊したからでしょう。」

「でもそもそも貴女達が魔法の本に頼ろうなんて思わなければこうならなかったのではなくて？」

ルーン姫にそう言われるとアスナは強く言えなくなった。

自分達が地道な努力をして魔法の本など求めなければこうならなかったのも確かだから。

「まあ、とりあえず勉強でもしましょうか？」

「なにもしないよりはマシでしょう。」

ルーン姫がそう言うと皆は確かになにもしないよりマシだと思い勉強をすることにする。

「私が貴女達を落としてしまったお詫びにみっちり勉強を教えてくださいあげましょう。」

ルーン姫は、そう言いアスナ達の勉強を見ることにした。

…これからスパルタな勉強会が始まる。

ルーン姫が勉強を教える時に寝ようものなら罰として間接をはずして、はめなおしたり。

バカレンジャーの中でも頑丈なものにはマツスルスパーク天をかけた。たりした。

尋常じゃない罰である。

勉強を教えるだけなのに…。

「ルーン姫さん。…このペナルティはやり過ぎじゃ…。」

「甘やかしたらためにならないんですよ？ネギ先生？」

ルーン姫は笑いながらそう言う。

…ネギは、そんなルーン姫に恐怖を感じる。

…まあ、当然である。

(これは甘やかすとか甘やかさないとかの問題じゃないと思うんですけど…ルーン姫さんの世界ではこれが普通なんでしょうか…?)

ネギは、そう思うが断じて違う。

こんなことすんのはルーン姫のいた世界でもルーン姫だけ。

「先生！体罰が酷すぎます！！」

「なに言ってるんですか？こんなはまだ軽いほうですわ。」

ルーン姫はこんなはまだ軽いのは当たり前という顔を普通にする。

アスナ達はまだこれより上があるの！？
…と思った。

ネギが上がるのかなものか少し気になってルーン姫に聞いてみる。

「…上つておもにどんなことを？」

ネギがそう聞くとルーン姫は語りだす。

「そうですね…超弩級のグレートおバカにやったことですけど一問間違えるたびにトゲつき鉄球を頭の上に乗せたり、ラッシュを一時間叩き込んだり、間接でステキなメロディーを奏でさせたり…あつ、まだまだ」

「ルーン姫さん…もういいです。」

ネギはルーン姫がまだ色々話そうとするのを止める。

聞くだけでなんか身震いがしてきたからだ。

バカレンジャーの面々も顔が青ざめていた。

ルーン姫のやることの怖さと超弩級のバカがそれもう死んでるんじゃない…と思ったからだろう。

「あー、因みに超弩級のグレートおバカは、ちゃんと生きてますから安心なさい。」

ルーン姫は超弩級のバカの生存を一応ネギ達に伝えた。

ネギ達は、それを聞くとホッとした。

「くだらない話しは、ここまでに勉強を続けますわよ。」

ルーン姫がそう言うと皆は勉強を再開した。

当然、皆はルーン姫が勉強を教えるときに居眠りや余計なお喋りはしなくなるのだった。

そしてルーン姫達が地底図書室で過ごしてから日がたち…期末テストテストまであと一日となった。

「期末テストとまであと一日というところですか。」

ビビビッ シャッ

ルーン姫は軽く運動をしていた。常人から見ればとてもじゃないが軽い運動には見えない。

ルーン姫が軽い運動をしていると遠くから悲鳴が聴こえてきた。

「これは、まき絵さんの声？とりあえず悲鳴のした場所に向かいますか。」

ルーン姫が悲鳴の聴こえた場所に向かうと石像（学園長）に捕まっていた。

そしてルーン姫は、その状況を見るとすかさず石像に飛び回し蹴りを食らわせた。

バコオ！

「フオー！！！？」

ズシーン…

ルーン姫に蹴られた石像は捕まえていたまき絵を離し倒れた。

石像が離し落ちそうになったまき絵は楓にキャッチされ無事に助けられる。

そしてルーン姫は倒れた石像に近づき足を持ち…振り回す。

「フオーー！！？」

「女子中学生を掴んでんじゃないですわよ！このヒロじい！！」

「いや、わしはそんなつもりじゃ…。」

「問答無用！」

学園長が言いわけをしようとしてもそれをルーン姫は聞かず。学園長を水に浸された地面に叩きつけ始める。

バシャン！ゴツ、バシャン！ゴツ。

「フオ！？ちよっ…やめ…。」

学園長はルーン姫に叩きつけるのを、やめるようにルーン姫に言うが絶え間なく叩きつけられているためちゃんと言葉を伝え

ることができない。

「ふはは！なんか楽しくなってきましたわ！」

ルーン姫は学園長を叩きつけるのが楽しくなってきた。テンションが上がる。

学園長がまだなにか言おうとするが聞かずに振り回しては叩きつけを繰り返す。

そうこうしてるうちに石像（学園長）の首の後ろがわにあつた魔法の本が飛んでアスナ達の方へいった。古菲が飛んできた魔法の本を無事にキャッチする。

「魔法の本ゲットアル！」

「フオ！？しまっ…！」

バシャン！ゴツッ。

ルーン姫は学園長の言葉を遮りまだ叩きつけていたが。

「飽きた。」

そう言つて学園長を投げ捨てる。学園長はとりあえず恐怖から開放されホツとするが魔法の本を取り返すために立ち上がりアスナ達に近づこうとする。

「本を返すのじゃー。」

「やだプー」

「古菲さん。アホな挑発をやってないでさっさと地上に帰らないと

期末に間に合いませんわよ？ 滝の裏側に非常口があるので早く帰りましょう。」

ルーン姫が、そう言うのと夕映がルーン姫に当然疑問に思ったことを聞く。

「ルーン先生…もしかしてとっくに出口を見つけていたのですか…？」

「ええとっくに見つけてましたわよ？」

ルーン姫は、なんでそんな当たり前のこと聞くの？…と言う顔をする。

「じゃあなんで出口のこと言わなかったんですか!？」

ネギがそうルーン姫に聞くとルーン姫はこう答える。

「だって聞かれなかったから。」

確かに皆、ルーン姫に出口を見つけたかどうかは聞いてなかった…
…聞いてなかったが…。

「だからって言わないことはないじゃないですか!？」

…とまあ当然の反応を返してきたのだった。

しかしルーン姫は、そんなことを気にせずに出口へ向かっていた。
アスナ達も石像が向かって来るのでルーン姫についていき出口へ向かう。

滝の裏の非常口は本来仕掛けがあったのだが…

「なんか扉に仕掛けがあったけど破壊しといたので簡単に進めますわよ。」

ルーン姫が破壊してたのでスルーだったが非常口に入ると凄く長い階段があった。

アスナ達はこれを登りきらないと帰れないのかと思うが…。

「じゃ、運びますか。」

ルーン姫は数人づつ掴んで上のエレベーターのあるところまでジャンプして皆を運んだ。当然、皆は驚くがルーン姫は、そんなことを気にしない。

下で石像が本々！！…とか言っている気がするが気にしないでおう。

ルーン姫達はエレベーターに乗り地上に向かおうとするが…

ブブブブブ

…と重量オーバーの音が鳴った。

「この程度の人数を運べないなんてガラクタエレベーターですわね。しかたありませんわ…はあ！！」

ルーン姫は天井に向かい全身からエネルギー波を放った。そして即座にネギ達をまとめて抱えて天井に空けた穴から脱出した。

「ルーン先生！？さっきのは一体…？」

夕映はルーン姫にさっきのエネルギー波のことについて聞くがルーン姫に適当にはぐらかされた。

「魔法の本があるからいい点、確實アル」

などと古菲がはしゃいでいたがルーン姫は魔法の本を奪いとると気功波で消した。

「な、なににするあるか！？」

古菲は魔法の本を消されたことに怒るがルーン姫はアスナ達に向けてこう言った。

「貴女達は私に勉強をみっちり教えられたのですからこんなものが無くても平気ですわ。…それに物に頼るだなんて真面目に努力したものに侮辱ですわよ？」

ルーン姫にそう言われるとバカレンジャーの面々は黙るしかなかった…確かにその通りだから。

「貴女達に最後に言うておくことがありますわ。…悪あがきに徹夜

で勉強などせずに、ゆっくり寝て休みなさい。」

ルーン姫は、それだけ言うと家に帰って行った。

アスナ達はルーン姫に言われた通り徹夜などせずに帰ってゆっくり寝て休むのだった。

そしてバカレンジャー達はテストで高得点を叩きだし2 Aは学年一位になることができネギはクビを免れることができ…そしてネギは正式な教員になることができたのだった…。

余談だが学園長は期末テスト終了後ルーン姫のところへ魔法の本のことを聞きに行ったのだが…

「あれなら消しましたわよ木っ端微塵に。」

「うそん!!?」

学園長はルーン姫に貴重な魔法書が消されていて大ショックを受けていたようだ…。

三時間目 図書館島とルーン姫（後書き）

ルーン姫「あの子達は超弩級グレートおバカと違って、みっちり教えれば成長する子達で良かったですわ！」

作者「そこまであの人がバカにしないで頑張ってもできない人だけなんだから……」

ルーン姫「こつちが必死に教えても平均32点は凄いムカつくと思いますけど?」

作者「うん……まあね……てかあの人のこと話してるけど彼、別にでないだよねこの小説。」

ルーン姫「別にでなくても構いませんわね。アイツは。」

作者（……仲間なのに冷たいなあ……）

ルーン姫「早く戦いとかはないですかね!」

作者「うーん……。」

ルーン姫「まあ、バカな作者は放っておいて……」

読者の皆さん今回もこの小説を読んで頂きありがとうございますわ。次回も私の活躍を楽しみにしてくださいな。」

作者「その言い方はちよっ……」

ルーン姫「ふんっ。」

ズドオン！

作者「げぼお！？」

ルーン姫「では皆さん。また次回で会いましょう。」

四時間目 ネギ、ルーン姫の言っことを聞く(前書き)

作者「修行って技修得以外はパツと終わるんだよな…。」

四時間目 ネギ、ルーン姫の言うことを聞く

麻帆良学園は終了式を迎えていた。ようするに明日からは春休みと言っことだ。

そしてルーン姫はその春休みを利用してあることをしようとしていた。

そのあることとは……。

「ネギ、修行しますわよ。」

「えっ!？」

ネギはルーン姫に急にそんなことを言われたので驚いた。

ネギは恐る恐る、ルーン姫に何で急にそんなことを言うのか、訳を聞いた。

するとルーン姫は、なにこいつ忘れてんだ…と不機嫌な表情を一瞬見せるがすぐに表情を戻し、ネギにあの時の約束を言った。

「アスナさんに魔法バレたことをどうにかしたら何でも言うことを聞くと貴方は言ったじゃありませんの？」

ルーン姫にそう言われるとネギは、あっ!…と言う顔になって自分の言ったことを思い出した。

「そう言えば僕、そんなことを言いましたね。

忘れてました…すみません。」

「思い出したならいいんですのよ。じゃあ早速、私の家で修行させ

ますわ。」

そう言つてルーン姫はネギを引っ張つて自分の家に連れて行つた。ネギは何故、ルーン姫さんの家で修行？…と考えたがその訳はすぐに分かつた。

「うわあ…凄いや！何だろこの機械！」

ネギはルーン姫の家の中のトレーニングルームに設置されてる機械を見て驚いていた。

見た目が明らかに未来的なものだから驚いても仕方はないだろう。

「これは重力を操作する機械ですわ。因みにこれの限界の重力は地球の一億倍ですわ。」

ネギはそれを聞いて目を見開いて凄く驚いた表情をした。

この世界の者にとって地球の一億倍はとてつもないからだろう。

「いつ、一億つて…！？……ルーン姫さんはもしかして一億倍の重力でも動けるんですか……？」

ネギはそうルーン姫に聞くとルーン姫は当たり前と言つた感じでネギに答えた。

「当然ですわ。一億倍の重力なんて私にとっては、ぬるいぐらいです。」

ネギはルーン姫が一億倍がぬるいと言ったのでこの人はどれくらい強いんだ！？…と思った。

ネギは自分がこのとんでもない人に修行をつけられると思うともの凄く恐くなった。

ネギが不安な顔をしているとルーン姫がその様子に気づき、気をきかせるつもりでこう言う。

「魔力トレーニングもちゃんとやるから安心なさいな、ネギ。」

ネギが不安になってるのは魔法使いとしての修行ができないんじゃないかとか思ってた不安ではないのでルーン姫の言った言葉じゃネギは全然安心することができなかった。

「まあ、私のすることは基本は基礎能力の向上なので技は自分で考えなさい。」

ネギはルーン姫のその言葉を聞かずに家から出ようと逃げようとしていた。

しかしトレーニングルームの扉は何故か開かない。

「逃げようとしても無駄ですわよ？結界を張りましたから。」

「ル、ルーン姫さん。結界張れたんですか！？」

ネギはルーン姫が結界を張れたことに驚く。

どうせこの人は魔法は使えないだろう…とルーン姫が格闘攻撃ばかりするから思ってたんだらう。

浅はかな考えである。

「僕はまだ死にたくありません！」

「大丈夫、死にそうで死なないギリギリラインまでしか私はやりませんから？」

正直それも凄く怖いことだと思う。ネギはそれを聞いてさらに怯えるがもはやルーン姫から逃れることなど………叶うはずもない………。

そして修行は始まる。

「ぎゃあああああああああああああ……！」

「これぐらいで叫ぶんじゃないですわよ！貴方につける修行は私が三戦士につけたのより軽いんですよ？」

ルーン姫はそうネギに言うがネギにその言葉は届かなかった。

………だってネギ、気絶してるから………。

「根性ないですわねえ………起きなさい……！」

そう言ってルーン姫はネギを蹴り起こす。

「げふっ!？」

「修行再開ですわ。」

そう言うとルーン姫はネギに再び修行をつける。

時々ネギがモザイクをかけなきゃいけないようなあれな状況にもなるがルーン姫が治癒功で治して修行は普通に続行される。

ルーン姫は師匠としては滅茶苦茶厳しいだけで、ピッコロの様に不意に優しさを見せることなどは特になかった。

ネギは何度も自主規制な姿になりながらも修行に耐える。

最初は『うわ〜ん！もう無理ですよ！』などとヘタれていたがそのたびにルーン姫にデスビームを撃たれ『泣くの止めないと次は当てます』と脅されるのもう泣かない強い子になった。

……………えっ？それ恐怖が強すぎて泣けないだけだった？

……………そこは気にしないほうがいいです……………。

この修行…と言うか拷問に近いことは春休みが終わるまで続けられた。

途中、アスナがルーン姫の家にさすがにネギを心配して来たがルーン姫の一睨みにより軽く追い返された。

ネギは、果たして生きているのだろうか……………？

そして春休みは終わり始業式。ルーン姫…だけは始業式にきていた。

……………ネギは？

始業式が終わったあと当然、アスナがルーン姫のところに来た。

「ルーン先生、ネギをどうしたんですか!？」

「ネギ……………?……………あっ!はいこれ。」

ルーン姫はアスナに真っ白な灰を渡した。

「え……………！？……………まさか！？ルーン先生！！」

アスナはルーン姫に敵意を向けた。

しかしルーン姫は全く動じない。

…というか笑っている。

「アスナ、貴方なにマジにしてんですの？さすがに私は弟子を真っ白な灰にすることはありませんわ。私はね。」

「じゃあ、ネギは？」

アスナはルーン姫がネギを真っ白な灰にしないことが分かるとネギは何故、始業式に来ないのかと疑問に思った。

ルーン姫はアスナの考えてることを読むとネギのことを伝える。

「ネギは私の修行の総仕上げで疲労してるので来れないのですわ。学園長にはちゃんと休むことは伝えてるので大丈夫ですわ。」
「疲労してるから来れないって……………ネギは大丈夫なんですか？」

アスナはネギは本当に大丈夫なのか心配でルーン姫にネギの状態を聞く。

するとルーン姫はニッコリ笑って答えた。

「ネギは大丈夫ですよ？」

……………ただし前のネギはもういませんけどね。」

「えっ！？」

アスナはルーン姫の前のネギはいないと言っ言葉が気になった。

アスナはルーン姫にそれがどういう意味なのか聞こうとしたがルーン姫はいつの間にか消えていた。

「あれ！？ルーン先生どこに行ったの……？」

ルーン姫がどこに行ったかと言つと……

「家はやっぱり落ちつきますわね。」

家に普通に帰ってただけだった。

ネギはどうなっているかって？

……それは次回わかります。

四時間目 ネギ、ルーン姫の言うことを聞く（後書き）

ルーン姫「ネギの修行、最初の段階は終了ですわ！」

作者「これでもうあのナヨってるネギはいないのか……………ナヨってるネギ好きな人に怒られないかな……………」

ルーン姫「別に怒られないんじゃないのですの？」

作者「だといんだけどね……………」

ルーン姫「次回はパワーアップを果たしたネギが出ますわ！読者の皆さん。必ず見なさい！」

作者「よろしくお願いします。」

五時間目 桜通りの吸血鬼(前書き)

作者「変化をとげたネギが登場！」

五時間目 桜通りの吸血鬼

今日は身体測定がある日。ネギは……まだ学園には来ていない。なのでルーン姫が担任の役割を果たしている。ルーン姫は教壇でぼーっとしていた。…すると身体測定をしている生徒の一部のある会話が耳に入ってきた。

「ねえねえところでさ最近寮ではやってる…あのウワサどう思う？」

「え……なによソレ柿崎。」

「ああ、あの桜通りの吸血鬼ね。」

ルーン姫は吸血鬼と聞くとある人物を少し思い出した。

「吸血鬼と言えば血を吸う相手の姿を自分好みの女性に変える常におーラ出しまくってるピチピチタイツの変態ですわね。」

「吸血鬼は別にそんな変態ではない!!?」

その言葉を聞いて生徒の一人エヴァンジェリンがルーン姫の言葉を必死になって否定する。

ルーン姫は何でそんなに必死になってんの?という顔をする。……微妙ににやけながら。

「必死に否定するのはもしかして貴女が吸血鬼だからですか?」

「そんなわけ……ないだろう……。」

「本当に?」

ルーン姫はクスクス笑いながらエヴァンジェリンの顔を覗きこむ。エヴァンジェリンは顔をそらしてルーン姫の視線から逃れようとす。その態度を見るとルーン姫は顔を覗くのをやめた。…しかし別

にエヴァンジェリンが嫌がったからとかではなくただ飽きたからである。

ルーン姫がエヴァンジェリンをからかうのをやめた少しあと教室の外から亜子の声が聞こえてきた。

「先生ーっ、大変やーっ、まき絵が…まき絵がー！」

「何ですの一体？まき絵さんがどうしたんですの？」

「と…とりあえず保健室に来てください！」

そう言われてルーン姫はとりあえず保健室に向かった。

そしてルーン姫が保健室で見たものは保健室のベットの上で寝てるまき絵だった。

「……………サボリですか？まるでキルガのようですね。」

「いや、サボリではなく桜通りで寝てる所を発見されて保健室に運ばれて来たんですよ。ルーン先生。」

ルーン姫に対してまき絵がここにいる理由を説明する。しずな先生、だがルーン姫はそれを聞かずに何か考えていた。

（まき絵さんから妙な感じがしますわ。…これは魔法の力のようですわね。…桜通りを調べますか。）

ルーン姫は少し考えたあと桜通りを調べることを決めた。桜通りの吸血鬼が関係してると思ったからだ。

（…てか犯人は大体目星がつかますけどね。）

満月の夜。桜通りは強い風が吹き桜の花びらが吹雪のようにちっ
ていた。

そんな桜通りを一人の生徒、宮崎のどかが歩いていった。
桜通りを一人で歩く彼女を電灯の上から眺める真つ黒な衣に身を包
む者がいた。そしてその者は…。

「27番、宮崎のどかか…悪いけど少しだけその血を分けてもら
うよ。」

そう言って、のどかに襲かった。のどかは襲いかかってくる人物
を見て恐怖のあまり…

「キヤアアア。」

と大きな悲鳴をあげた。
…しかし悲鳴と同時に…

ドゴオオ！！

轟音が鳴り響き、のどかに襲いかかったものはふき飛んでいた。…
鳴り響いた音が気になり恐怖に目を閉じていたのどかが目を開ける
と…目の前には、眼鏡をかけておらずやや目つきが鋭くなり頬に傷
を残した…ネギがいた。ネギの風貌の変化にのどかは思わず声を
漏らす。

「ネギ…先生…？」

「大丈夫ですか？宮崎さん？…それにしても体の調子が全快になつて軽く運動をしようとして外を走つてたら生徒が襲われてるとは…ところで貴様！」

ネギはキツとのどかに襲いかかった人物を睨みつける。のどかはそのネギの目を見て少し怯えた…だってそれはのどかが知っているネギがする目ではなかったからだ。

「俺の生徒に襲いかかるとは…覚悟は…！？」

ネギはのどかに襲いかかった人物を見て驚いた。なぜならのどかを襲った人物は…ネギのクラスの生徒。エヴァンジェリンだったからだ。

「な、なぜ君が…？」

「ボーヤ…今のは魔力を使つてなかったな？それに今の一撃は洗練されていた。…誰かに師事してもらつたのか？」

エヴァンジェリンのその言葉にネギは一応答えた。

「ルーン姫師匠に鍛えてもらったんだ。…それよりもエヴァンジェリンさん。君はなぜこんなことをしている？」

ネギは全くオドオドせずエヴァンジェリンになぜこんなことをしているかを聞いた。前のネギなら『エ…エヴァンジェリンさん！？な、なんでこんなことしてるんですか！？』などと少しオドオドしながら聞いていただろう。

エヴァンジェリンはネギに言われたことを答えずに何か考えこんで

いた。

(ルーン……やはりただ者じゃないか…ボーヤをここまでの男に短期間でするとは…。)

エヴァンジェリンはルーン姫のことをただ者ではないと考えていたが今更である。…エヴァンジェリンはとりあえずこの場を去ろうとしたが。

「どこに行くんだ？」

「なっ!？」

軽くネギにまわりこまれた。エヴァンジェリンはさすがの早さに驚いたが魔法の触媒を取り出し魔法でネギを撃退…しようとするが。

「抵抗は、よすんだ。生徒を傷つけない。」

「ボーヤ!？いつの間に触媒を!？」

いつの間にか触媒を取られていた。

「くっ、くそ!」

エヴァンジェリンは空に飛び上がり逃げようとする。…しかしそれはあえてネギは見逃した。先にやるべきことができたからだ。そのやるべきことは。

「宮崎さん、気絶してる…目の前で色々起きすぎてビックリしてきたからだろうな…。」

気絶したのどかをどうにかすることだった。ネギはとりあえずのど

かをお姫様だつこしてまわりに誰かのどかを任せられる人はいないかと探そうとしたら。

「ネギ！？…あんた雰囲気変わったわね…。」

「ネギくん。なんか凛々しくなつとるなー。」

アスナと木乃香がやってきた。ネギはアスナに近づくと。

「宮崎さんを頼みます。」

「えっ？ちよつとネギ…。」

ピッ

ネギはアスナにのどかを渡すと高速移動でこの場から消えエヴァンジェリンを追いに行った。

…アスナはネギが急に消えたので思わず

「どっなつてんの…？」

と呟いていた。

「はあ…はあ…ボーヤの奴いくらなんでも短期間で強くなりすぎだ…。」

「予想外の出来事が起こってしまいましたねマスター。」
「全くだ。……これも全てボーヤを鍛えたルーンのせ……」
「誰のせいですって？」

急に聞こえた声を聞いた瞬間、エヴァンジェリンの背筋は凍りついた。その声の持ち主はもちろんルーン姫だ。

「自分の不甲斐なさを棚にあげて人のせいにしてんじゃないですよ。」

「ちゃ、茶々丸。レーダにこいつの反応はなかったのか？お前無反応だったか……。」

「はい……というか今もありません。」

「気をゼロにコントロールしてるんですもの当然ですわ。」

ルーン姫はさも当たり前のように言うがこの世界では当然ではない。

「それよりも来ますわよ？」

「は……？何が……」

シャッ

「見つけましたよ、エヴァ……ってルーン姫師匠！？」

エヴァンジェリンを見つけたと思ったたらルーン姫までいたのでネギは思わず驚くがネギはすぐに落ち着きエヴァンジェリンを見た。

「さあ……エヴァンジェリンさん、大人しくしてください。」

「くっ……魔力が完全に戻れば……。」

ルーン姫はエヴァンジェリンのその言葉を聞きネギがエヴァンジェ

リンを捕らえようとするのを止めた。

「ルーン姫師匠!?!」

「貴女は魔力が完全じゃないからネギに負ける…そう言いたいんですね?」

「魔力が完全なら負けんさ…私は大魔法使いだからな!」

それを聞くとルーン姫はニイ…と笑ったあとこう言った。

「じゃあ、魔力を取り戻したあとでネギと戦いましょうか?」

「ちよつとルーン姫師匠!?!」

ネギはルーン姫に対して文句を言いたそうにするが無視される。

「いいのか…?」

「私がいいと言ったらいいのです。」

「こうなったらこの人は止められないか…。」

ルーン姫が妙にノッてるのを見るとネギはもう止められないとあきらめた。成長したネギでもルーン姫はやはり止められなようだ。

「ハハハハ!私にチャンスを与えたことをあとで後悔するがいい!」

エヴァンジェリンは小悪党のような笑い声をあげながら茶々丸とともにこの場から去って行った。

「ネギ…勝てますわよね?」

「当然です。」

ルーン姫はそれを聞くとふっと笑い自分の家に帰って行った。

ネギの真価が見れるのはエヴァンジェリンが魔力を完全に取り戻した時になりそうだ。

五時間目 桜通りの吸血鬼（後書き）

作者「まだネギの真価、見れませんねー。」

ルーン姫「力を出しきれない状態の雑魚を相手にしてもしょうがないから仕方ないですわ。」

作者「雑魚つて…。」

ルーン姫「読者の皆さん。ネギの進化した強さを楽しみにしながらこの小説を読み続けなさい！」

作者「ネギの力を見せる日は遠くないんですけどね…。」

ルーン姫「あつ！ついでに私の世界の物語を書いたオリジナル小説 PLANET もよろしくですわ！」

作者「主人公はルーン姫じゃないけどね…。」

ルーン姫「ふんッ。」

ドズン！

作者「おぶう！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4774z/>

魔法先生ネギまZ！

2011年12月30日01時50分発行